



俳諧
 猿蓑附合注解
 全




初時雨卷
夏月卷
憔悴卷
薯蕷汁卷

序



御説の道もまじく隆基に歌ふ志といひ
附名をとりんともさる人おかりんは時をとりて
世に附合乃輕書そ色あきまことしとて
さるものたを解に地をさ満く或ハ附白
まを他におもて母子の注解を並へ簡
るものを執を隔し解を執りて
附をたきたさる不便かといひ却て讀者を
迷心を生かすもさる事ありしを
注解せしもの古書より記しあるを
正し妙子の歎ひをしを附合不歎は



あまのついでに... 附きの... 高九を...
并に... 運公且一面の...
... 又附方の...
... 初... の... と...

明治廿年五月

桃支庵指直



俳諧様義解

桃支庵指直纂述
其角出永城校正



あまのついでに... 附きの... 高九を...
... 又附方の...
... 初... の... と...

有... 押... 倉... 又

た... 牙

着... 瀧... 物... 紀

一 操... 兆

中... 中... 店... 野...

此... 野... 野... 野...

市中... 凡兆

市... 物... 産... 産... 産...

野... 野...

物の白ひのふりかへし
類よりしきりし
門こそ井流し

二書科
去来

早一續き
一付

一付一き
兆

田子前
一付

甘
一付

一付
一付

層物
一付

たの
一付

一付
一付

旗
一付

一付

一付
兆

一付
一付

た
一付

扱
一付

一付
一付

一付
一付

一付
一付

一付
一付

晴ふかげし祝儀のそ哉合あり

何ゆゑを強きまも涙を

来

蒸白乃舟を寄く詞を傳へて歩く人の影に
強きまも色し清くあらし何ゆゑを氣を沈む
— 後人と傳へ詞を言ふ合あり

君あつとちり色ハ唐を板敷

北

あまの皮あふ水清くむに泥まらぬ只此のそまも
— たる強きまも色し清くあらし何ゆゑを氣を沈む

雪あつと風遠き色ハ花の陰

霜

雪あつとあらし清くあらし何ゆゑを氣を沈む
人の影に何ゆゑを強きまも色し清くあらし何ゆゑを氣を沈む
— たる強きまも色し清くあらし何ゆゑを氣を沈む

雪あつと風遠き色ハ花の陰

霜

雪あつとあらし清くあらし何ゆゑを氣を沈む
人の影に何ゆゑを強きまも色し清くあらし何ゆゑを氣を沈む
— たる強きまも色し清くあらし何ゆゑを氣を沈む

一丈け梅の帯やまろきりく

凡北

秋夜の寒さをしほしき。菘又穂輝古交り

よしハ誓——不道すのらん。爰へおのしるも後
一を心とせしるれは。自れは。我信とし。為ひ終つるを。
去る三月。何れか。不れ。水。
世の模様。心懸けし。去る。女。今。其。終。不
以。醒。の。う。り。終。を。淨。色。し。ま。せ。ひ。と。そ。季。作。を
今。せ。し。ま。し。

畿乙州東武行

梅の葉は鞠子の花のこと。計。道。

為書のよとく。乙州の武り。此。別。し。ま。し。と。道。を
う。し。ま。は。梅。も。咲。き。あ。葉。も。あ。り。と。あ。り。の
海。も。あ。り。と。あ。り。鞠。子。の。花。は。も。終。り。計。を。終。
よ。ら。れ。と。り。終。の。風。も。吹。か。し。ま。り。

乙州

暎平。一。當。中。一。此。旅。之。の。安。哉。付。し。る。と。割。し。き。は
あ。り。此。梅。の。葉。も。と。聲。を。い。せ。し。一。字。眼。し。

石。山。崔。暎。小。田。ふ。と。持。成。と。あ。り。如。 陸。須

為。白。紙。由。卷。史。と。い。ふ。と。一。終。り。し。と。場。の。こと。

此の事女に傳ふ事ありしに、
約きよしと云ふ事ありしに、
三つを奉らば一格ありしに、

志を記し、
志男

田代を記し、
策又白鷹と書し、
の形勝を記し、

行、
州

下、
居る人、
八月、

二階の、
篇

二階の、
秋、
群を

放り、
男

若白、
一、
おの、
せん、
まは、
り

内なる法を陣中に輜重頭とてし胡の乃
軍に布陣の法を授けし事とて其法と
て備前の法と小西方の法と長れ一也

すもきふ松のちつゝのさうらう 男

隊任乃配列齊しこゝる軍陣のさゝ物教あり
そ場の形勢候に非しと信じて一子たすこ

二秋のれ落れれによみきこ 州

あつゝのさうらうに世をなすに
つぼしとて教をなすにむり信濃公佐世の
わつゝに落れれをなすにむり信濃公佐世の

いさよん物とて虫のちりれをなすに二秋の飛
しに紙をれをなすに信濃公佐世の

うつろふる秋の風ふりておぼしき
信濃公佐世の法を授けし事とて其法と
自らは二秋のれを授けし事とて其法と
不しちをよみきこしと中におぼしき
ししとていふに信濃公佐世の法を授けし事とて其法と
かやしとていふに信濃公佐世の法を授けし事とて其法と

信濃公佐世の法を授けし事とて其法と 智月

秋の風をなすに信濃公佐世の法を授けし事とて其法と
ししとていふに信濃公佐世の法を授けし事とて其法と

よめのふゆをいひし

衣履をいひし

末

若のくし井流し

汗拭ひ指のき

半残

衣履をいひし

たも入よれらるる

わのき世行

七子

汗拭き

別きの意の

あさ

大鏡

残

若の衣

若の衣

若の衣

若の衣

若の衣

若の衣

若の衣

若

若の衣

習性福をせしむる

雜

破き扇持し俗人のさし候者なりと見え打裁の
白し一結し〜
又を人の歌し

唄歌しの隣ハ遊記極情ハ 二方

月〜を場を〜唄歌しの刺さるの掬
根を白物結ひ〜

そくを海〜あくめんを歌 凡

隣〜度〜程身もせぬを扱〜世に
留り〜一嫌主人〜
〜あ〜編居の終し

かくらち〜金は〜 凡

翁の人乃御非を〜
とら之の終をか〜

〜す雷か〜の割下弦 史部

降〜
〜の終し

〜の連可定〜 中

おれ〜
〜

籠のた〜
〜

よれ連〜
〜

ちのたふにやうしてそら
たしし^〇 舞の袂を深くとは曲その白ゆえ
まを妍^〇 くら 舞の袂を深くとは曲その白ゆえ

附白藁方七名之事

有心 舞 近白 記
近白 柏子 色立

- 一 有心 舞とは多うくたふ白人 悔の事ありて古農之
商まらうし 不ふ久木の情あり 老老の姿ありて
のふとそ人 凡随ひて名義の物 柏子 色立 柏子
色立 凡舞の事 近白 記 近白 記
按 舞を舞も 柏子 色立 柏子 色立 柏子 色立
一 有心 舞とは多うくたふ白人 悔の事ありて古農之
商まらうし 不ふ久木の情あり 老老の姿ありて
のふとそ人 凡随ひて名義の物 柏子 色立 柏子
色立 凡舞の事 近白 記 近白 記 近白 記
按 舞を舞も 柏子 色立 柏子 色立 柏子 色立
一 有心 舞とは多うくたふ白人 悔の事ありて古農之
商まらうし 不ふ久木の情あり 老老の姿ありて
のふとそ人 凡随ひて名義の物 柏子 色立 柏子
色立 凡舞の事 近白 記 近白 記 近白 記
按 舞を舞も 柏子 色立 柏子 色立 柏子 色立

抄ありの送果實をて種なく附ておろして百穀ハ
 六七十月白雲抄と廿五白雲抄をてして物言ふに
 手抄抄をててあつたに云々して附ては言は
 其のまゝのこし一色は變化ははるに類ふるを
 一 送白をてて類と別別名をてて何百を後の類に
 するに附ては附ての事してはるに送白の類とて
 類をててて一色をてて別名の類をててて
 一 類の名稱をてててててててててててててて
 其類をてててててててててててててててて
 一 送白をてててててててててててててててて
 其の又白雲目録にててててててててててて

79 一 ちうあつとててててててててててて

- 一 物言をてててててててててててててててて
- 一 物言は類改のおまじに白川の類と

附言八辨抄事

其人其暢時分附言
 天相親相時直 面類

- 一 一人をてててててててててててててててて
- 一 一人をてててててててててててててててて
- 一 一人をてててててててててててててててて
- 一 一人をてててててててててててててててて

一 時を以てはまゝ秋をこころし武日記に於ては
 此時を以て春の時と云ふ解を多用す——或は
 有心の時と云ふ——或は秋の時と云ふ——
 一 天相と日月星辰と風俗を以て——
 時を以て時を以て——或は世の衰微と親を以て
 一 親相と日月と云ふ花と云ふ或は世の衰微と親を以て
 一 時を以て時を以て——或は世の衰微と親を以て
 一 時を以て時を以て——或は世の衰微と親を以て
 一 時を以て時を以て——或は世の衰微と親を以て

一 菊の影を以て源氏物語に於ては——或は軍に於ては
 或は能くしては——或は世の衰微と親を以て
 一 時を以て時を以て——或は世の衰微と親を以て

七石 謹白

有心
 秋懐——梓——
 思ふを以て——或は世の衰微と親を以て

有秋
 里下——
 思ふを以て——或は世の衰微と親を以て

有句
 此の葉を以て——秋の影
 杉影を以て——月影を以て

起情

湖波のまじけ手懸く思知し
後形思ふも水の如く女

近附

竹く降る里の松明
後武志のまじけ思知し

拍子

芥子止の小指さうふ折し
折しつゝまじけ思知し

色三

川流し如流くまじけ思知し
草ふ時川一坊の白壁

一解花白

其人

おと雛さつゝまじけ思知し
可くまじけ思知し

手物

大のこ拍さるるまじけ思知し
唐さう思知し

時分

棧隙能切ひまじけ思知し
小豆のまじけ思知し

時元

くまじけ思知し
まじけ思知し

天相

長物さうまじけ思知し

白ゆし 空の 影ハ 殺野村乃 音をいすへ—— 女と
系は 天相の 愛態を 志す人—— 中を 獄
層の 想像を 志す人 市中 女 閑隠を 知人
—— 女子ハ 為明を 志す人の 伴を 志す人

空掬の事——

障子に 影の 夕日を 映し
舞臺に 影の 老の 目を 映し

赤糸の 影を 映し 女 影

空の 影を 映し 女 影

空の 影を 映し 女 影

空掬とは 空の 影を 映し 女 影
空の 影を 映し 女 影
空の 影を 映し 女 影
空の 影を 映し 女 影
空の 影を 映し 女 影

一字一掬の事——

空の 影を 映し 女 影
空の 影を 映し 女 影

双六の目を眺めてゆく

引くは、
運着、
押すは、
城、
如く、
解、
自、
初、
首、
多、
ち、
骨、
二、
記、
新

明治三十年七月八日版權允許
同年同月出版

箕原述兼出版人

和歌山縣士族

矢部 楨 茂



東京中野區前坂町四番地

南江堂支店

發賣所

中村新三郎



東京中野區春木町三丁目
三十二番地

